



嫌ひなるものに英雄草いきれ
 人の世に象の老いゆく大暑かな
 餡蜜の運ばれてくる静けさよ
 朝夕の海霧に仕へて牛を飼ふ
 花火師の手首に鹿の革巻かれ
 ゆんたくの長寿自慢や島らつきやう
 えんがちよとコロナ断ち切れ罌粟坊主
 晩学の机洗ふや一花置く
 燭台にたまる蠟涙銀河濃し
 堅州国の使者か杉菜の不死身なる
 川風を木戸から招き夜涼かな
 糸蜻蛉岩の力を吸いとりし
 うなずきは大きな器日向水
 おつこうな八ヶ岳をいただく夏祭

空蟬を並べる日々や休み疾く

堤 保徳
 中里 結
 後藤行雄
 西牧千恵子
 一志貴美子
 田村道子
 田添博美
 中澤良子
 西川五月
 宮島英子
 谷口とし子
 手島 互
 宮澤羅夢
 功刀たかね
 千葉任子

小子部 駆くやいかづち大とどろ
 空蟬を転入生へプレゼント
 八月のシーグラス気負はず生きる
 天の川牛の屍曝す町
 霍乱や雲集まりて冥くなる
 兵士らはみな瘦せており土用凧
 灯籠木六角牛山より高きかな
 扇風機背に居座る無力感
 背越してふ鮎爽涼の日田の空
 厄年の地球に硯洗ひけり
 八月大名一生分の恋をせり
 群生の姥百合修験者のごとし

森 千恵子
 水谷亮一
 許勢元貞
 有手 勉
 坂井久男
 小松皋左社子
 後藤 冴子
 松本京子
 松本よし乃
 岩上諒磨
 白勢 修
 関 道子

草を引く草も必死よ吾も必死
 炎天や土偶の顔のぺっしやんこ
 うつろひの流るる霧に似てゐたり

土屋安子
 菊池理津子
 宮城昭代

岳俳句の現在 十月 ⑤18

— 同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

巻頭寸言。必死に鳴く虫の音に打たれた。九月半ばの明け方四時半、庭の叢に佇み、浮かぶままに虫の句を三十分ほどで七十句ほど書いた。これは初めての経験であった。骨の髄まで虫の音に侵され、ことが湧いて来るのである。感動などときれいごとではない。虫の音が書かせ、我ながら狂気の沙汰であった。しかし見直すと気負いだけ、公表できるほどの作品はない。推敲が大切なことが身に沁みている。

嫌ひなるものに英雄——独断でもいい、一面の真理が欲しい

嫌ひなるものに英雄草いきれ 堤 保徳

歴史は英雄が動かす。これも一面の真理。いや庶民、民衆こそ歴史の主人公だ。これもまた真理。作者は後者か。英雄は嫌いだという。例えば、現今話題の世界の指導者は英雄といえるかどうか。フランスのナポレオンなどは頭に浮かぶが、英雄の定義は難しい。厳密な意味ではなく、英雄は嫌いだ。この独断が爽やかで、一度は言ってみたいと思う。むんむんたる夏草のいきれ。英雄など息が詰まるとは痛快ではないか。

人の世に象の老いゆく大暑かな 中里 結

たら、時に自己との関わりを考え、採取した句材の内側の探究をみたい。

えんがちよとコロナ断ち切れ罌粟坊主 田添 博美

「えんがちよ」は子供の遊び唄の文句から。不浄なものや汚れに触れたものを切り捨てる民間の習俗が、遊び唄として各地に拡がっている。「びびんちよ」も同じ。毒を孕むけし坊主を結びに据え、明るく囃し立てる調子なのが巧い。

晩学の机洗ふや一花置く 中澤 良子

「机洗ふ」が「硯洗ふ」と同じく、七夕前日の古来中国の習慣として季語になっている。例句が少ない。慎ましい句で堅実な作者らしい気持が伝わる、いい句である。

燭台にたまる蠟涙銀河濃し 西川 五月

類想があるが、光景は手堅い。夜は蠟燭をともし、静夜

今月の秀句

花火師の手首に鹿の革巻かれ 一志貴美子

火傷に気をつけたものか。鹿の革は他の動物の皮革に比べ、伸び縮みが比較的自在。軽く緊った感じも手首を動かしやすくする。着眼が鋭い。職人の体験から伝承された知恵には計り知れない深さがある。地味な手首に焦点を当てたのもいい。

人間ばかりが齢をとるのではない。象が老いる。暑い最中、動物園の象を見た。自分の老いばかりではない、象の動きが鈍く、急に弱った感じ。それがことのほか衝撃を与えたという。アフリカ象は寿命が六十年から七十年くらいといわれている。身近な象への生き物感覚から老いを問題視した点に感心した。

餡蜜の運ばれてくる静けさよ 後藤 行雄

甘味どころでの一服。しずしずと紹の美人でなくてもいい。雰囲気になにより涼味を呼ぶ。持駒自在。衝撃的な社会詠の後にはがらり場を変えた神楽坂裏街風情とは、やりませねえ。

朝夕の海霧に仕へて牛を飼ふ 西牧千恵子

夏でも冷涼たる北海道の日常詠。手堅い。涙が滲むほど自然。「海霧に仕へて」に籠る暮らしの諦観が動い。

ゆんたくの長寿自慢や島らつきやう 田村 道子

沖繩方言「ゆんたく」はおししゃべりの意。安里屋結(あさとやゆんたく)など、作業歌として唄われてきたものか。島辣椒を食べ、精を貯え、口からは長寿比べの出まかせ、カジマヤーは九十七歳の長寿祝い。そんな自在な作。対象を定め

を楽しむ。ことに秋の夜は戸外の銀河が部屋を満たすほど星空に包まれる。ささやかな、雰囲気演出に感心する。

堅州国の使者が杉菜の不死身なる 宮島 英子

根之堅州国という。あの世。根が地中深くに伸びる杉菜を別世界からの使者とみた。納得させる力のある句である。

川風を木戸から招き夜涼かな 谷口とし子

高山市在住の作者。さしずめ川は宮川か。涼味ひとしお。

糸蜻蛉岩の力を吸いとりし 手島 亙

見るからに細身の糸蜻蛉。大きな岩に止まっても、身はか細く一筋の糸。張りついたように逃げない。素朴な着眼だ。

うなずきは大きな器日向水 宮澤 羅夢

納得してうなずく。ものを肯定してうなずくのは自分が大きな器になったようだという。日向水を湛えるような。隠喩(例えばなどといわないでドンピシャ、こうだと決めたいい方)がよく考えられている。日向水もそこにあるか。

おつこうな八ヶ岳をいただく夏祭 功刀たかね

「おつこうな」は「億劫な」。長い時間、永遠の意。仏教語である。永遠を思わせる八ヶ岳を仰ぐ、夏祭。御柱祭か。

小子部とは——少年は雷に敏感なので、避雷の呪術にも長けたものか、史実と幻想の間へ興味湧く。

小子部 駆くやいかづち大とどろ 森 千恵子

不思議な句である。小子部(避雷のマジック使いの少年か)の業民が逃げていく。雷がとどろく中を。特異な句がお目見え。史実を少し。古来、雄略天皇(四一八〜四七九・実在がほぼ認められている最初の天皇)の時代の豪族、小子部(これは小子部)に、少年を組織して宮中の護衛や雑務(中に避雷の呪いをする部もあった)を担わせた。『日本書紀』など史書に見える話である。続けたいところであるが、ここはこれまで。

空蟬を転入生へプレゼント 水谷 亮一

いい生徒ですねえ。学校が変わる。クラスに溶け込めな

今月の秀句

空蟬を並べる日々や休み疾く 千葉 任子

夏休みが今日でお仕舞。この世の地獄。哀しくて哀しくて。机の上に採集した空蟬を並べて数えるが、うわの空。なんでこんなに短いのか。ああ、休みはたちまち過ぎる。学校は宿題のやま。やってもやっても終わらない。ああ、また明日からか。老いてもこの実感は新鮮そのもの。作者は花巻の先生。

岩手県遠野では盆に死者を迎える幡を「灯籠木」(とろぎ)という。正式には「むかいとろげ」(石井正巳「遠野物語の誕生」)。背後の山の名もごつい。生者も死者もともに暮らす里。

扇風機背に居座る無力感 松本 京子

初めは涼しくても、扇風機は人間を腑抜けにする。ご用心。

背越してふ鮎爽涼の日田の空 松本よし乃

「背越し鮎」とは大分日田地域独特の内臓を抜いた鮎を輪切りにした食べ方。溪流の川音が響くようだ。

厄年の地球に硯洗ひけり 岩上 諒磨

先に七夕前日の「机洗ふ」を紹介した。これは「硯洗ひ」。災害災難の多い年なので、何事も、思いは気からという。自分分はささやかでも地球を澄ますために硯を洗うという。これは殊勝な作者。

八月大名一生分の恋をせり 白勢 修

農家は稲に花がつき、しばらくの間は暇。そこで恋をした。一生分の思いを込めて。大名気分。ご報告までに、結果は後日。

群生の姥百合修験者のことし 関 道子

薄暗い日陰好みの姥百合。修験者の喩えが巧み。

い。この悲しみは子ども心に悩みの種。女子かな。いやプレゼントが空蟬だから男子か。心やさしい学級、学校。

八月のシーグラス気負はず生きる 許勢 元貞

貝の欠片が海岸で波にもまれて角が取れ、すべらかになるのがシーグラス。些細な貝の欠片から、重い八月を「気負はず」と自分に言い聞かせた。年配になると盆のある八月をどのように越すかは重い課題であろう。呟くように思いを込めた句。

天の川牛の屍曝す町 有手 勉

東日本大震災後の被曝被害の避難地域が念頭に浮かぶ。天に天の川、地に牛の屍とは、ことばを失う緊迫感が捉えられている。よく見て、思案の末に凝縮された映像の造型と見た

霍乱や雲集まりて冥くなる 坂井 久男

老人が暑気にあたり気を失う。急性の症状に崩れるように蹲る。その心理を巧みに捉え、情景ともに手堅い。

兵士らはみな痩せており土用皿 小松皋左衞子

例えばウクライナの愛国の兵士像か。土用皿に一抹の救いを想像する。このような句が日常に詠まれ、読者も受け入れる世のかなしみの真相に世界中はもっと敏感になりたい。

灯籠木六角牛山より高きかな 後藤 冴子

青雲集

草を引く草も必死よ吾も必死 土屋 安子

ささやかな草引きに全身であたる尊さよ。教えられる。

炎天や土偶の顔のべつしやんこ 菊池理津子

母がむかし小麦粉で作ったおやきが「べつしやんこ」。炎天下に掘り出された土偶の顔から思い出した。泣き笑い。

うつろひの流るる霧に似てゐたり 宮城 昭代

霧深い信州の秋。時間は霧のように微粒子と化して流れ、私はいつの間にか齢を重ねている。抗うこともできない自然。

他に同人集・岳集・青雲集から推薦候補をあげる。

葦麻のあらがふ谷戸の出水かな 木村 安以

どつてもよいと思ふこと増えぬはたた神 須藤 瑞枝

炎天を知らずよ木曾の漆倉 宮原 久子

木曾の闇神輿捲りに真つ二つ 小澤 準一

波に足を浸す八月の沖繩 竹野入美奈子

草叢の動悸はげしき晩夏かな 名取 朋子

大花火山の呼応は父祖の魂 今井 愛子

優曇華やたまにうめうめ歎きたく 原田ゆりこ

かぶりつく桃やふくしま十一年 岡田三矢子

やがて我が門火となりて燃ゆるなり 島田 謙吉

推敲・添削 93 ●●●●●●●●●● 宮坂 静生

○ここが問題

原句 曇天を くすぐつている 揚げ雲雀 石井紀美子

先月号でまとめをした後に、さらに添削例の投句があった。

添削一 慈しみ深き曇天揚雲雀 増田 義幸

添削二 曇天の裾を伝はる揚雲雀 同

コメントが付く。「SNS時代の今、もっとくだけた、もっと俗なフレーズが一般化され、それが文芸における言葉のふかみを空虚なものにしてしまわないかと危惧します。先生はどうお考えですか」。おっしゃる通りだと考えます。俗な表現が文学として許されるには何が必要か。私はそこに作り手(作者)の見識(広い意味での思想)があると考えます。我々は人間社会に生きていますが、自分中心ではなく、人間がかされている人間を取り巻く大地への畏敬の念(広い意味でのアニミズム・自然愛)でしょうか。添削例二が面白い。

○ここを省略し、ここを添削する

原句 秋出水流木溜めて橋を呑む 尾関 英正

添削 秋出水橋に流木からみたり

一部始終を言わない。ポイント(問題)だけをおさえる。

原句 夏登山サルのコシカケ目の真中 柳原 清泉

添削 山中のさるのこしかけ目の真中

「猿の腰掛」は秋の季語へこしかけて山びこのぬし猿草

飯田蛇笏。夏登山」を省略、秋の句にしたらどうか。

原句 白南風や仕事途中で冷茶する 船坂 昌文

添削 白南風や仕事途中で茶をすする

「白南風」は夏の季語である。実際冷茶を飲んでも、ここは白南風を生かし、「茶をすする」でよい。「で」↓「に」。

原句 翅揺らし蜜一心に浅葱斑 山ノ内つねよ

添削 浅葱斑蜜を吸ふ間も翅揺らし

主語を初めに置く方が句が明快になる。

原句 ほおずきに灯ともりて父母の魂 稲垣 敏子

添削 父母の魂かほおずき灯をともし

疑問形にする方が読み手に共感を呼ぶ。

原句 大婆の名はとふと云ふ時鳥 垂井 霜葉

添削 大婆の名はとふと言ふ夏館

虚子に(飛驒の生れ名はとうといふほととぎす)(五百句)

がある。いくら何でも季語は変えたい。

原句 秋天や知ること多し喜寿の日々 清水 慧

添削 秋天や教へられたる喜寿の日々

「知ること多し」が分りにくい。切れも三段切れになり不

自然。ここは受身表現をとり、謙虚に。読後がさわやか。

原句 雷神の通り過ぎたる滴続く 内田 周穂

添削 雷神の通り過ぎたる雨滴かな

夕立後の雨滴だけで、十分に滴りが続く様子が見える。

原句 松虫草風雨に耐え豪華なり 土屋 隆

添削 雨風に耐えて松虫草ひそか

「豪華」はどうか。むしろ「ひそか」ではないか。

原句 夏草と格闘するや朝四時 若月 行人

添削 夏草を刈り倒したる夜明け前

表現とは何かを考える。やさしい言い方が響く。